

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第61号 2020年1月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム プログラミング教育元年とICT	小宮山 道夫	2
逸話と世評で綴る女子教育史(61) — バプチスト、フレンドその他の会派の女学校 —	神辺 靖光	6
佐賀高等学校報国団『報国団誌』創刊号(1943年) から — 生活部「生活部報告」、研修部修養班「報告」 —	谷本 宗生	9
学校資料の教材化を模索して⑤ — クラーク高校の三浦校長を事例に —	八田 友和	12
明治後期に興った女子の専門学校(16) 小説に描かれた下田歌子	長本 裕子	16
戦後生徒会活動成立史の研究 ⑦ — 『新しい中学校の手引』における生徒会論 —	猪股 大輝	20
カレッジノベルの研究への道(10)：久米正雄「受験生の手記」	吉野 剛弘	28
木下広次をめぐる史料 — 教育勅語に関する校長訓話(1890 年10月30日)草稿(1) —	富岡 勝	31
「未完の教授学者」としての長谷川乙彦③ — 「個性と教育」を読む(1) —	長谷川 鷹士	34
『久徴館』のめざすもの(1)	小宮山 道夫	37
体験的文献紹介(9) — 新渡戸稲造の女子教育とプロテスタン ト系女学校の研究開始 —	神辺 靖光	41
第6回執筆者勉強会記録	雨宮 和輝	45
短評・文献紹介		50
会員消息		51

コラム
プログラミング教育元年
と ICT

小宮山 道夫
(広島大学)

2020年が幕を開けた。世間的にはオリンピックイヤーというのが最初に思い浮かぶだろうか。大学受験生にとっては最後の大学入試センター試験というイベントが間近に迫っている。来年の新しい

大学入学共通テストがこれほどまでに揉めてしまったのを見ると、受験校にこだわって受験が来年までずれ込むというリスクをとるよりも、確実に入れるところを選択しようかと思ひ悩んだり、そのようにしろと谷町からプレッシャーがかかったり。受験生の苦しい胸の内や如何ばかりか。どちらを選んでも目論見通りにはいかないのがまた受験の恐ろしいところではある。改元とともに天皇誕生日も2月23日に改まる。週休二日の職場であれば今年も来年も3連休となる。受験シーズン、年度末シーズンの真っ只中では、いくら祝日が増えなくても大学教員には関係の無いところ。働き方改革が裁量労働制の者に実質的に改革が及ぶにはまだしばらく月日が必要か。その前に倒れなければ良いが。ようやく名前に慣れはじめた首都大学東京は、東京都立大学の名前に先祖返りする。まったく新しい大学を作るといふ触れ込みで、身を切り、大切なものも失った改革だったように見えるが、「昔の名前で出ています」となることについては関係者の思いも複雑だろう。もっとも部外者などにはその心情はきっと理解の及ばぬところではある。広島は公立大学が県立広島大学と紛らわしい名前に改名したことを真似て、いつそのこと都立東京大学にしたら良いのに、というのは勿論冗談である。

さて、教育界一般ではやはり平成29・30年改訂の新しい学習指導要領の小学校での全面実施が大きなトピックであろう。来年には

中学校、再来年には高校で年次進行で実施されることになる。変更点は様々だが、ここではプログラミング教育に注目したい。

小学校学習指導要領「総則」では「各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。（第2の2の(1)）」と述べ、その中の「情報活用能力」の育成を図る具体的な内容として、「各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ること。」という環境整備と「各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。」という運用面での改善を示している（第3の1の(3)）。その上で、子どもたちがコンピュータを道具として使えるようになるための基礎操作技能を習得させることと、コンピュータをコントロールするための考え方を習得させるという2項目を掲げている。

それではそのための環境整備ができていないかと言えば、文部科学省の「平成30年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査（平成31年3月現在）」

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1420641.htm)によれば、「教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数」は全国平均で5.4人／台（最高1.9人／台（佐賀）、最低7.5人／台（愛知））、教育用コンピュータ整備率は全国平均で18.6%（最高53.9%（佐賀）、最低13.3%（愛知））、普通教室の無線LAN整備率も全国平均で41.0%（最高73.4%（静岡）、最低13.6%（新潟））と基本的に低調であり地域ごとのばらつきもあり、

何だか心許ない。ついでに言えば「小中学校で「1人1台」パソコン配備」とうたい昨年末に補正予算を閣議決定したのは良いが、パソコンではなくタブレットを導入しようとしている動きがあるのも少し気にかかる

(<https://resemom.jp/article/2020/01/24/54437.html>)。

ダイヤモンドOnlineの2019年4月4日の記事「義務教育の「残念なプログラミング授業」、現役エンジニアが危惧」(<https://diamond.jp/articles/-/198744>)によれば「文部科学省の新学習指導要領が例示する課題が掲載され、“触り程度”に落ち着いた」ため、「そこから「プログラミング的思考」をどうやって深めていくのかは、各学校や先生の力量次第ということだ」とし、プログラミング教育が教師の力量に大きく左右されることを指摘している。環境のないところで教師ができることは限られるだろうし、教師にとっても本人の特性次第では負担でしかないということに陥りかねない危惧もある。

不安に思えばかりのようだが、世の中はどんどん便利になっている。先述ダイヤモンドOnlineの記事に出てくるが、マサチューセッツ工科大学メディアラボが、無料で利用できる子ども向けビジュアルプログラミング言語「スクラッチ」というものを公開している(<https://scratch.mit.edu/>)。図1がその画面。そこには世界各国の小さなプログラマーたちの作品が多数共有されている。この作品たちの作り方がなかなか良くできている。図2の中央の「ブロックパレット」にある「命令」を右側の「スクリプトエリア」に配置して左下の「スプライトリスト」にある「キャラクター」を命令どおりに動かして遊ぶのだ。そして完成した作品はすぐに世界公開できる。遊んでい

るうちに基本的なプログラミングの考え方は大まかにつかめるだろう。NHKが「ワイワイプログラミング」というサイトで解説をしているので興味のある方は是非一度覗いてみて欲しい

(<https://www.nhk.or.jp/school/programming/start/index.html>)。どう見ても遊んでいるようだが、これが後々効果をあらかず重要な学習になるはずだ。



図1 「スクラッチ」の
トップページ

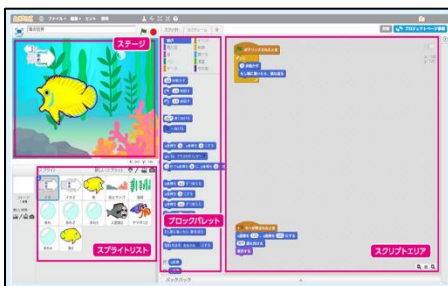


図2 NHK「ワイワイプログラ
ミング」での説明画面

ところで筆者には高専に通っている愚息がいるが、高専の宿題のほとんどがe-Larning、しかも学校の通知も試験の連絡から日々の教室変更や宿題の指示、果ては追試の通知に至るまで全て一斉送信でスマホに連絡が来る。親も登録できるので配信を希望すると毎日メールが多くて辟易するほど。普通科高校でスマホ厳禁の兄弟とは大きく異なり、スマホを手放しては学業に支障が出る状況だ。部屋でもスマホを握りしめているので注意をしようとする、宿題の最中だったりする。YouTubeを見て惚けている時との見極めが必要になって困る。時代に取り残されないように、大人たちの意識改革もどうやら2020年から大いに必要になりそうだ。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

逸話と世評で綴る女子教育史(61)

— バプチスト、フレンドその他の会派の女学校 —

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

これまで、カナダメソジストを中心とするメソジスト派の女学校開設、日本基督教会、聖公会、組合基督教会系の女学校を述べてきたが、これら大組織の教会系に属さないプロテスタント女学校もこの時期にはたてられている。それらの目ぼしい学校をあげよう。

駿台英和女学校 米国浸礼教会 American Baptist Mission の日本伝道は幕末に遡るが、明治初年に来日したアーサー J.H.Arthur は明治9年、東京第一浸礼教会を創立し、以後、東北と関西に伝道網をつくっていった。アーサーは来日の航海中、駐米公使であった森有礼と同船したよしみで、東京駿河台の森邸内に洋館をたてた。男児を集めて英語塾を開いたが、明治8年、同教会の女性宣教師キダー A.H.Kidder が来日したので女子教育に切りかえた。明治9年、森有礼の代理人・藤井三郎を校主として女学校を開校、校名を友来社としたが、明治13年、キダーの名をとって喜田英和女学校とし、さらに18年、駿台英和女学校と改称した。キダーは大正2年、駿河台で亡くなるまで一生を駿台英和女学校に捧げた。学校はキダー没後衰え、関東大震災前に廃校になった(小沢三郎『日本プロテスタント史研究』『都史紀要9 東京の女子教育』)。

捜真女学校 バプティストが明治19年、横浜にたてた学校である。その源流は明治9年、米国バプティストミッションのサンズ Miss C.A.Sands が横浜山手の居留地で10人ほどの子女に英語と聖書を教えていたものをサンズが帰国するためブラウン婦人 C.W.Brown が明治19年に引き継いだものである。20年、横浜英

和女学校と名付けたが明治35年、捜真女学校と改称し、現在の捜真女学校中学部高等学部に至る(『キリスト教学校教育の現状』)。

弘前女学校 明治10年代、青森県には女学校がなかった。弘前教会の牧師・本田庸一はこれを憂え、函館の遺愛女学校校長・ミス・ハンプトンに事をはかった。ハンプトンはメソジストの同校の経費を割いて献じたので本多は弘前教会の中に女学校を設立した。校名は遺愛女学校の設立に際し多額の献金をしたライト夫人(本シリーズ47参照)にちなんで来徳女学校とし本田庸一が校長になって開校した。明治19年5月のことである。22年、元大工町に新校舎をたて校名を弘前女学校と改め後年に続いた。現弘前学院遺愛中学校高等学校である(『キリスト教学校教育の現状』)。

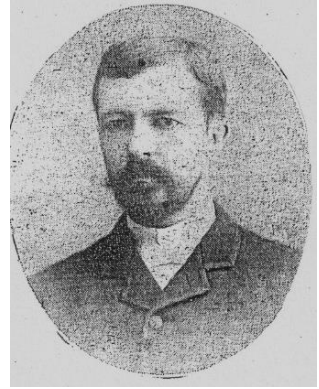


本田 庸一

北星女学校 明治16年、静養のため函館にいた米国長老教会の婦人宣教師スミス S.Smith が数人の女子に聖書と英語を教えた。19年、スミスに札幌師範学校から招聘があったのでスミスは9名の女生徒とともに札幌に移った。20年、スミスは彼女を慕う女生徒のために女学校をおこした。校舎は北一条西の岩村透長官邸内の馬小屋を改造したものであった。スミスは午前中、師範学校で教え、午後、女学校の教育に当った。ここでスミスは札幌農学校の新渡戸稲造、宮部金吾ら札幌バンドの協力を得た。明治37年、北四条西に9,000坪の校地を買い校舎を新築した。この時までは“スミスの女学校”と言っていたが、この時から北星女学校と名乗った。新渡戸稲造の命名である。後に東京に恵泉女学校をたてる河井道子はここに学んでいた。現北星学園女子中学高等学校である(『キリスト教学校教育の現状』)。

フレンド

普連土女学校 明治16年、米国フィラデルフィアのフレンド会 Society of Friend の女性たちが友会夫人外国伝道会を組織した。友会は日本の事情を聞こうとたまたま当地に留学中の新渡戸稲造を招いた。席上、新渡戸は日本の女子教育振興の必要を説いた。友会はこれに共鳴し、同会のコサンド J.Cosand 夫妻を派遣することを決めた。コサンド夫妻は明治18年来日、津田仙の知遇を得て麻布の津田仙邸に寄寓し、聖書の講義をはじめた。またコサンド夫人は少女を集めて編物や洋裁、英語などを教えた。コサンドが借りた家のもと学農社の建物であった。明治10年、駒場に官立農学校(帝国大学農科大学の前身)ができてから学農社は経営不振になり、解散した。津田は校舎をこわして、これを二棟の建物にかえ一つを津田邸にし、一つをコサンドに貸した。この建物にコサンドの聖書講義が発展した日本基督友会とコサンド夫人の家庭教育が発展した普連土女学校が誕生したのである。



ジョセフ・コサンド



ミセス・コサンド

明治20年、近藤真琴の攻玉社の教員・久野英吉を名義上の校長として普連土女学校が発足した。まもなく通信省官吏でコサンドの通訳者・海部忠蔵が校長となり、21年、芝三田に土地を購入、翌年校舎を新築してそこに移転した。コサンドは明治33年帰国、海部は明治45年まで校長の任にあった。現普連土学園中学校高等学校である(『普連土女学校50年史』)。

佐賀高等学校報国団『報国団誌』創刊号(1943年)から

— 生活部「生活部報告」、研修部修養班「報告」 —

たにもと

むねお

谷本

宗生(大東文化大学)

佐賀高等学校報国団『報国団誌』創刊号(1943年12月)所収から、報国団生活部「生活部報告」及び研修部修養班「報告」などを、以下に引用紹介したいと思う。当時の校内を取り巻く状況も実によく分かる資料といえよう。

報国団規則に依れば生活部は生徒の風紀身上学資宿所衛生其の他生活全般に亘りて指導斡旋監督する役目を有する。むかしの学校では風紀に関することは別として学校が生徒の学資や宿所などに関して積極的に世話をやくなどは絶無であつたと言つて差支なく、従つて生徒の側からも学校に対してそれを期待し要望するなど考へてもみなかつた所である。然るに其の後凡そ大正の中頃からは生徒の福利施設といふことが大切な意義を有つことになつて来た。さうなつて来たのは何のためであるかについて今ここで詮議する必要を認めないが兎に角事実として学校の福利厚生施設の必要は盛んに強調せられ、学校、校友会共済などの手に依つて食堂集会所娛樂室が設けられ購買組合的なものが造られ、学資の給貸与が考へられ、果ては暖炉やレコード、弁当暖めまでが問題にせられ、何か此の種の施設で設備漏れのものは無いかといふことに頭を悩ます有様であつた。本校では旧共済部の如きもさういふ一般的情勢の中に生れたものであつた。ある時生徒自治会総会で教室に暖炉を設けよとの提案があつた。尤もその時は無用論は多数であつたが。社会が進歩すれば共同精神が発達するのは当然であり、この精神が団結の要件であることは論をまた

ない。さうして互助的施設によつて不遇な生徒に進学の道を開いてやることも意義ある事業である。殊に近年の学生否な国民の健康状態に顧みて衛生保健の問題は実に国家的重大事であつて、而もその解決には共同の力、公共的施設を必要とするのである。要は人をして強からしめることである。福利の主眼点をはき違へて生徒を甘やかせることとなればそれは人を弱からしめることになり殊に物質的、肉体的に快適な生活を追及して止むことがなければ不知不識の間に精神の剛健性を破壊し依頼心を増長させるおそれがある。われわれは現代の情勢に鑑み将来の負荷の大任を思へば青年の快適生活を大いに犠牲にするとも剛健の気風を大いに振起し、困苦欠乏に堪へきる逞しい精神を長養するの急務たるを痛感せざるを得ないのである。

端的に言へば現下の情勢下に於て戦力増強の一面として物を造ると同時に物を節することは緊急の要務であることは言ふまでもない。物を節することは結局衣食住をはじめ生活の全般に亘りて思ひ切つたる刷新にまで突進まなければならぬ。生活の刷新は多くの場合快適生活と決別するの覚悟を必要とするのである。(198頁)

次に、報国団研修部修養班「報告—修養班の新発足に際して—」を示しておこう。

大東亜戦争は愈々熾烈なる決戦の連続となり、その深刻さは、将に皇国未曾有の危機に直面する。かかる時、我等、皇国を護持せんとする者は、何を頼み、何に依るべきや。これ正に我等国家の指導者として立つべく高等学校に学ぶ者の、日夜心肝を碎く問題である。

…されば、我等は宜しく一大活眼を開きて、国史に没入し先哲の精神に沈潜し、大いに義勇の精神を体するところなかるべからず。而して、之れ実に我等修養班の志す所。

嘗つては、高校は所謂人格の完成、真理の探究の名の下に、時代の潮流の外に立ち、超然とうそぶいていた事もあつた。然し、斯くの如きは、それこそ一時の風潮に過ぎなかつた。高校生活はここに百八十度の転換をなした。而かもそれは単なる一なるものから他のものへ遷つた如き相対的なものであるべからざることは、論を俟たざる所である。今こそ真に皇国の道義に生くる高校として立つべき秋である。

ああ今我等 皇国に生を享け、而かも青年青春の秋にこの大事の時に合ふ。されば我等の熱と意気とを以て、險難の一路を突破せざるべからず。見よ、我等の前途には苦難の彼方、坦々たる大道が開けんとなす。又聞け、我等の背後には 国民の大行進の靴音が高らかに響きつつあるを。(113～114頁)

また研修部絵画班「報告」も、報国団活動報告の1つとして重要であると思われるので示しておきたい。

絵画の有する使命がかく崇高なものであるのは、今更喋々の多言を要せず明らかであるが、我等が最近に於て、他に文化運動の盛んなるところにありて、而もこの絵画による、人格、殊に情操の陶冶につとむべき機会を有しなかつたのは、我々の深く遺憾とする所であつたところから、今度芸能班に於ては、絵画による情操陶冶の手段、機会として、週一回の素描を行ひ、一学期一回の各自作品の合評を行ふ事となつた。

…何と言つても、開始以来日が浅いのであるから、その発展、ひいては我が校内に於ける、かかる情操、陶冶の気運の隆興は、諸兄等の熱烈なる協力に待つ事が多い。(134頁)

学校資料の教材化を模索して⑤

－ クラーク高校の三浦校長を事例に －

はった ともかず
八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

1、はじめに

これまで本連載では、伝統や歴史のある学校に眠っている学校資料に焦点をあて、その教材化の模索を行ってきた。一方で、筆者の勤務校をはじめとした歴史が浅い学校や新設校にも学校資料は存在する。例えば、大会で優勝した際のトロフィーや記念品などはまさにそうであろう。それだけでなく、人物学習の視点から、歴代の校長や現役校長も教材になり得ると考えている¹⁾。

以上を受け本稿では、クラーク記念国際高等学校の校長である三浦雄一郎氏を通して、本校の行動指針である「夢・挑戦・達成」を考える授業実践を行ったため、その概要を整理・提示する。

2、三浦雄一郎校長の教材化

筆者の勤務校である、クラーク記念国際高等学校(以下、クラーク高校)は、1992(平成4)年に開学した高等学校である。入学してくる生徒層としては、小学校や中学校在籍時に不登校を経験した者が多い²⁾。筆者の勤務する芦屋キャンパスだけでも、再出発(リスタート)を果たそうと毎年100名以上の生徒が入学してくる。クラーク高校は、行動指針として「夢・挑戦・達成」を掲げている。これは、生徒・教職員全員が意識すべき指針とされている。「大きな夢をもち、その夢に向かって、何度も挑戦し、達成していく」そんな思いが込められた行動指針であると理解している。その行動指針を体現し、生徒に行動で語る校長として、開校から現在に至るまで、登山家や冒険家として有名な三浦雄一郎氏が校長を務められている。80歳を超えてなお、挑戦し続ける姿が、本校の行動指針である「夢・挑戦・達成」を体現しているといえる。そのような三浦校長の姿は、生徒た

ちの再出発(リスタート)を応援するにふさわしい姿だと考えている。よって、人物学習の一環として、三浦校長の姿を学ぶことで、生徒たちの再出発(リスタート)を応援する授業を全5時間で計画し、実践した。この授業では、勤務校が所蔵している三浦氏の登山風景のパネルや写真、『クラーク記念国際高等学校 by AERA—私だけの未来をつかむ—』などの活用を行った。

3、授業実践の概要

授業実践の概要については、以下の次の通りである(表1)。

- (1)科目名:基礎日本史(学校設定科目)
- (2)日時:2018年11月・12月(木曜日6時間目)
- (3)場所:クラーク記念国際高等学校芦屋学習センター
- (4)受講人数:6名
- (5)授業担当:筆者、鈴木康二(公財・滋賀県文化財保護協会)
- (6)担当:筆者が1～5時間目の授業を担当した。

なお、鈴木氏には2時間目の授業において、出張授業に来ていただき、博物館での勤務経験を活かした、人物の略年表のまとめ方についてご教示いただいた。

(表1)授業の流れ(全5時間)

時間	内 容
1時間目	<p><u>「三浦校長ってどんな先生？」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・三浦校長について知っていることを発表させる。 ・三浦校長について、調べる方法について意見を出し合う。 <p>※この時間で、AERA 本などの活用を行った。</p>
2時間目	<p><u>「三浦校長の履歴書をつくろう！」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・調べたことをもとに、三浦校長の履歴書をつくる。
3時間目	<p>※この時間で、三浦校長のパネルや写真を活用した。</p>

4時間目	「自分の夢・挑戦・達成は？」 ・三浦校長の履歴書を事例に、「夢・挑戦・達成」について考える。 ・将来の夢実現や目標達成のために、何ができるかを自分に置き換えて考える。
5時間目	

(筆者作成)

4、考察

本研究の成果は主に二点ある。

第一に、将来の夢や目標をもてた(再確認できた)ことである。多くの高校生にとって、きっかけや理由がなければ、自分の夢や目標に向き合うことや、再確認する機会は少ないのではないだろうか。事実、本実践を行うなかで、将来の夢が明確になる者や、自身の将来の夢について再確認した生徒を一定数見受けることができた。ここからも、本研究が、生徒自身の将来や目標を考える一助になったことがわかる。

第二に、比較的歴史の浅い学校や新設校における学校資料の活用について事例紹介ができた点である。先述したように、筆者の勤務校は開学28年目の比較的新しい学校である(2019年12月時点)。そのような歴史の浅い勤務校の玄関にも、北海道本校の野球部が甲子園出場を決めた際の記念プレート(お皿)や、運動部が大会等で入賞・優勝した際のトロフィーや賞状などの資料がいくつか展示されている。ここからも、歴史の長さに関わらず多くの学校に学校資料が所在・所蔵されているであろうことは想像に難くない。本研究が、そのような資料を活用する際の、一助になれば幸いである。

【備考】

本稿は、『みんなで活かせる!学校資料』(村野正景・和崎光太郎編)に掲載した、「第1章2節(4)クラーク記念国際高等学校での実

践」を加筆・修正したものになります。

なお、本稿で執筆した内容は、個人の見解であり、所属する組織の公式見解ではありません。

【謝辞】

本実践を行うにあたりまして、公益財団法人滋賀県文化財保護協会の鈴木康二氏にご協力いただきました。記して御礼し申し上げます。

【註釈】

- 1) 歴代校長ならびに現役校長の肖像画等も教材になると考えている。
- 2) もちろん、入学してくる生徒全員に不登校経験があるわけではなく、専攻や教育システムに賛同して入学する生徒も多くいる。

【参考文献】

- ・村野正景・和崎光太郎(編)2019『みんなで活かせる!学校資料-学校資料活用ハンドブック-』学校資料研究会
- ・八田友和2019a「学校資料の教材化を模索して-集合写真の活用を事例に-」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』(53) pp.2-4
- ・八田友和2019b「学校資料の教材化を模索して②-絵葉書の活用を事例に-」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』(58)pp. 14-18
- ・『クラーク記念国際高等学校 by AERA-私だけの未来をつかむ』(朝日新聞出版2018年)
- ・クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス公式ホームページ
(最終確認2019年12月14日)
<https://www.clark.ed.jp/kinki/ashiya/>

明治後期に興った女子の専門学校(16)

小説に描かれた下田歌子

ながもと ゆうこ
長本 裕子(ニューズレター同人)

明治40年2月23日、日刊『平民新聞』第33号から始まった下田歌子への攻撃。同年11月に歌子が学習院女学部長を解かれた背景に一体何があったのだろうか。

歌子の「余が辞職の顛末」(『下田歌子先生伝』)によると、“39年3月、内部改革の必要性から、田中光顕宮内相より突然華族女学校の廃止と学習院女学部への統合を言い渡され、十数人の教官整理を命じられた。この時、田中宮内相は、自分が当局にいる限りはどのような誹謗讒口があっても心配することはないと保証した。ところが、翌40年10月、『投書があつて、世間の事には院長(乃木希典40年1月就任)が心を痛めている。院長の十分な信用が得られないところに長く留まるのはいかなものか』と、辞任をすすめた。昨年、教官整理を迫った時との非常な違いに不快感を覚え、このような長官のもとに長くいるべきではないと辞職を決意した。”というのである。「世間の事」とは、『平民新聞』の攻撃に関する世間の反響をさすのであろう。これについて歌子は、“解雇した華族女学校の元教官らが団結して、新聞に自分を誹謗したのではないか。あるいは、生徒や父兄に直接に間接に自分の悪口を告げて、妨害したのではないか”と記している。

40年11月25日の『報知新聞』に「学習院女学部長 下田歌子突如辞職 憶測さるゝ其の原因の諸説」が掲載された。2,300字余りの長文であるので、要点を記す。

- 一、いずれ女学部長を校長の位置に改めようという下心があつたにちがいない。しかし、院長となった乃木將軍を動かすことは不可能と見て取った女史は半ば捨鉢的に辞職を申し出た。

二、女史は、学習院女学部長、高輪の両宮殿下の御教授、実践女学校の経営、清国女子学生の教育と多大の趣味を有している。そのため、多年閑地を期待していた。

三、華族の子女を導くには、女史はあまりに圭角があり、敵を有す。下田を斬るべしとは心ある華族間の年来の宿題であった。一方で、御姫様の教育に与って、婚儀を整えるため、華族間に下田信仰がある。乃木院長は、女史の後任は男子でも差し支えなしという考えを持っていることを女史は察知した。

記者は、歌子の平生と、学習院の内部に通じている人々を訪ねて聞き取り、この三説にまとめたという。

このような騒動の後、歌子の宮中奉仕時代の上官であった佐々木高行侯爵が、42年3月、実践女学校・女子工芸学校創立満十周年記念式典の折、80歳の高齢にもかかわらず出席し、歌子の弁明をした。

“…喬木に当る風は強き為であろうか、女史は実に敵の多い人で、常に世間から、随分手痛き攻撃を受けて居られるけれども、私共は人が何といおうとも、新聞が何を書こうとも、女史に対して一点の疑念をも挟まない。妻も娘も同様に女史を信じている。…自分は何と告げられても女史を全く信頼して、大切な内親王殿下の御教育を一任していた。内親王もご成人されて深く女史を信任されている。…”と、歌子の人格を保証する言葉であった。佐々木侯爵はこの翌年に逝去した。

佐々木侯爵の言葉を裏付けるかのような資料がある。43年6月、博文館発行の雑誌『冒険世界』に「痛快男子十傑投票当選!」が載っている。政治家の人気第1位は大隈重信、実業家第1位は雨宮敬次郎、文士第1位は大町桂月などある中で、「番外偉い婦人」第1位は下田歌子(12,375票)、第2位は乃木大将夫人(7,753票)である。『平民新聞』の攻撃の後にもかかわらず、歌子の人気は圧倒的だ。

昭和59年5月、作家志茂田景樹は『花の嵐 明治の女帝下田歌子の愛と野望』で、歌子の本質を「強烈な上昇志向はあっても、それは旧いしがらみとときたりのからまった縦線をまっすぐ這いあがることなのだ。」と、同時代の自我に目覚めた与謝野晶子や平塚雷鳥と比べても、歌子は封建時代に培われた旧思想から脱しきれなかったとする。

平成2年、作家林真理子は下田歌子をモデルにした『ミカドのおんな^{おんな}淑女』で、歌子のねらいはあくまでも宮中の女官長になること、つまり、天皇のお手がつき、典侍になることであったという。

平成6年10月、作家南條範夫は『妖傑下田歌子』で、“明治の多くの男性は、武士的儒教的道徳を口にしながら、その私的生活は乱脈を極めていても、愛国を唱え、忠君を叫べば、私的素行は全く問題とされなかった。歌子が非難され、弾劾されたのは、一に彼女が女であるという理由だけからではなかったか。”と観る。

小説とはいえ、いずれも実名で描いている。さらに平成11年2月、『妖婦下田歌子「平民新聞」より』が風媒社から出版された。日刊『平民新聞』第33号から第75号の41回にわたって連載された「妖婦下田歌子」を新漢字、新かなづかいに改めたものである。その解説で山本博雄は、“元老山県有朋は、伊藤博文の直属で、皇后の信頼が厚い歌子の宮廷政治への影響力をそぐ狙いがあったのではないか。山県は、帝国主義・国家主義への己の欲望の邪魔になる社会主義者などの根絶を企んでいた。歌子はその犠牲の一人にされたのであろう”という。

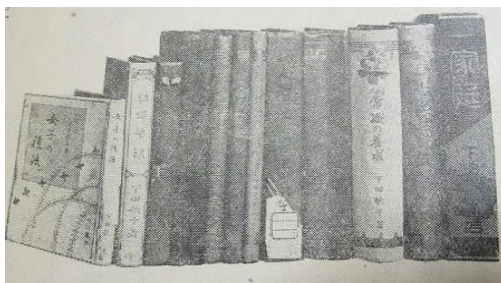
さかのぼって、作家松本清張の『昭和史発掘』（昭和39年7月から46年4月まで雑誌『週刊文春』に連載）の第16話「政治の妖雲・穩田の行者」は、歌子が傾倒した行者飯野吉三郎について語っている。“「日本のラスプーチン」と言われた飯野は、宮中に入る野心を抱き歌子を利用した。飯野は歌子と同郷の寺の子であった。歌子が出会ったころは、神託を告げる預言者を自称して、児玉源太郎ら

軍人や山県有朋ら政府高官を虜にしていた。歌子は『平民新聞』騒動の火消しを飯野に相談したらしい。飯野は山県に別件を耳打ちして圧力をかけさせ、『平民新聞』を廃刊へと追い込んだ。”別件とは、後に幸徳秋水ら社会主義者を一掃した「大逆事件」につながる事柄である。そんな飯野とも歌子は浅からぬ仲であったというのだ。

学習院女学部長辞職のご褒美であったのか、明治41年4月、従3位という民間の女性としては最高の地位に叙せられ、多くの女性のあこがれの的になりながら、私生活においてはかくも多くの男性遍歴や醜聞にさらされた下田歌子。いったいどちらの顔が本当なのか。

ともあれ、歌子は、皇女の御養育、上層から下層階級まで広く一般女性の教育、教科書の編さん、『家政学』『泰西婦女風俗』をはじめ多くの著作、「海老茶袴」や「授業服」の考案、清国留学生の育成などを通して、明治時代の教育界に与えた影響や功績は多大である。

実践女学校・女子工芸学校は、44年3月、実践女学校高等女学部・実科高等女学部と学則を改正しながら、大正14年1月、専攻科を実践女子専門学校（現在の実践女子大学）へと昇格させ、発展していく。



下田歌子の著作

参考文献

『実践女子学園八十年史』

『下田歌子先生伝』故下田校長先生伝記編纂所 編集・発行

松本清張著『対談 昭和史発掘』文春新書

戦後生徒会活動成立史の研究 ⑦

—『新しい中学校の手引』における生徒会論—

いのまた だいき
猪股 大輝(東京大学大学院)

前稿までの整理

前稿では、これまでの議論をまとめつつ、以降の連載が「1949年2月の『新しい中学校の手引』以降、相次いで論じられることになる「生徒会」指導論について確認していく」ことにフォーカスすることを述べた。また、こうした議論の前段として、「生徒自治会」(ないし「自治会」という名称が「生徒会」へと転換した時期を特定すべく、『手引』の成立過程を検討し、その変更が1948年8月～1949年2月のどこかの段階で行われたものであることを論じた。

本稿では、以上の整理を踏まえつつ、①『新しい中学校の手引』の全体的内容について概観した上で、②同書の生徒会論を整理し、これまでの議論との比較考察を合わせて行う。

『新しい中学校の手引』の内容

『新しい中学校の手引』は、1949年2月、「文部省学校教育局編」として明治図書から出版された。同書刊行の目的と受容について、執筆者の一人である林部一二は後年、次のように回想している。やや長いですが、同書の性格が極めてよく理解できる箇所であるので引用したい。

中等教育課在任は1か年【注：22年9月～23年8月、9月より官房文書課法規係(後の総務課審議班)へ移動]であったが、第2の思い出として残っている仕事は、文部省学校教育局編「新しい中学校の手引」(昭和24年2月発行)の編集であった。新制中学校の制度は発足したが、この新しい学校の目的、性格、施設、設備、教育課程、教育方法などは何一つとして具体的に明らかでなかった。〈中略〉そこで、新制中学校とはどんな

具体的な目標を持ち、どんな性格を持つのであるか、それはいかに建設され、運営されていくべきであるのかなどについて、まず、第一に新制中学校の校長と教師に対して、つぎに学校の管理者や指導主事のような人々に対してじゅうぶんな周知が必要なのである。これなくしては、とうてい新制中学校は育たないことは火をみるよりも明らかである。このような事態を背景として作成されようとしていたのが、「新しい中学校の手引」であり、それは真赤な表紙で発行されたのでそれ以降しばらくは、“赤本の手引書”と愛称されたものである。¹

以上の引用から明らかな通り、『手引』は、甚だ不十分な基礎のもとに見切り発車的に開始された新制中学校の教育・運営の一切に対して、包括的な「手引」を与えるものであった。同書は全15章301頁に渡る大部なもので、まさにこの目的を果たす企図をもって出版されたと言える。以下は、同書の目次である。

第1章	中学校の根本的性格	第6章	特殊教科活動	第11章	教授設備
第2章	生徒の特徴	第7章	市民としての教育	第12章	学校図書館
第3章	教科課程	第8章	学校の組織	第13章	新制高等学校及び小学校とのつながり
第4章	教授方法と教育技術	第9章	学校の職員	第14章	学校と社会
第5章	中学校生徒の指導	第10章	中学校の校舎	第15章	新制中学校の評価

表1:『手引』の目次構成

このうち、「生徒会活動成立史」研究たる本論が確認したいのは、第6章「特殊教科活動」の記述である。同章こそが、文部省刊行物において「生徒会」が初出となる箇所である。

『新しい中学校の手引』の生徒会論

『手引』の教育論の大きな特徴は、教科と教科外活動の双方を課程内に含みこむ、後に「教育課程」と呼称される課程論の萌芽が見られる点にある²。例えば、以下の箇所にはそのような課程論が明確に現れている。

我々がうけた学校教育を振り返って見るとき、多くの正規の学科よりも、学校における特殊活動の方が、はるかに多くわれわれの人格の陶冶に影響したということが分かる。こう考えてみると、われわれは、特殊教科活動がもはや正課外のものと考えべきではなく、反対に、学校生活の必須の一部であり、学校の教育プログラムの重要な一部であると見なすべきであると、いわざるを得ない。³

このような指摘のもとに論じられるのが、同書における「特殊教科活動」論であり、後に「特別教育活動」論、現在で言うところの「特別活動」論へと接続する議論である。そして、まさにこの議論の中に、本連載が着目する「生徒会」論が現れるのである。

以下、同書における生徒会論を確認する。具体的には、生徒会論を生徒会活動の理念面（意義・目的論）、組織面（いかなる組織を生徒会は持つべきか）、活動面（いかなる活動を生徒会は行うべきか）に分けて考察したい。

〈理念面〉

最初に確認したいのは、生徒会の意義に関する同書の記述である。同書は生徒会の意義・目的を次の7点にまとめている。

1. 第一の目的は、生徒をして、民主社会における生活様式に習熟せしめることである。〈中略〉
2. 第二に、生徒は、会議を開く多くの技術を習得しなければならぬ。〈中略〉
3. 生徒会は、高い道義的水準を打建てることを目的とする。〈中略〉
4. 生徒会は、生徒の学力向上に務めなければならぬ。〈中略〉
5. 生徒会は、学校及び社会における指導者の養成を目的とする。〈中略〉
6. 生徒会は、生徒たちに、お互を知り、理解する機会を与えることを目的とする。〈中略〉
7. 生徒会は、学校活動全体のプログラムに従って、特殊教科活動を十分に発展させることを目的とする。⁴

以上の意義づけにおいて、特に注目すべきことは、次の2点である。ひとつめに挙げられるのは、生徒会の意義の第一は、民主主義の学習との関連で把握されている、という点である（第一、第二、第五の目標に顕著）。これは、同書の別の箇所では、生徒会は「民主主義の見地から最も重要なものであ⁵」と述べられていることから理解できる。

第二に指摘できるのは、生徒会が、前述の「教育課程」的発想と結び付けられている点にある。第三、第四、第七などの目標に顕著であるが、生徒会は単に民主主義の学習のために設けられているものではなく、「学力向上」など、従来教科学習が担ってきた役割をも付与されている。このことは、取りも直さず、学校における活動を一体のものとして捉え、相互の関連性を強調しようとする「教育課程」的発想を示したものであると言えよう。

それでは、以上のような意義づけを与えられた生徒会は、実際どのような組織を有し、活動を行うことが構想されていたのだろうか。

〈組織面〉

まず組織について。同書は、その条件を大きく5つ挙げる。すなわち、①「全校を通じ、一つの組織が作られ」ること、②「他の団体【幹部組織、近隣の学校、地域社会など＝引用者注】と緊密な連絡のとれるように組織すること」、③ ホームルーム(クラス会、委員会、部会)、学年会(学年会、委員会、部会)、全校会(中央委員会又は協議会、部会、全校集会、教師と生徒の会、教師と生徒の父母の会など)、校外(部落会、近隣の学校との会など)のすべてを包含すること、④「生徒の自発的参加によって設置された組織であること」、⑤「生徒がその運営にあたること」の5条件⁶である。以上のような条件に従って、同書は生徒会が有すべき委員会構成などについても言及する。これをまとめると、次のような概念図を作成することができる。

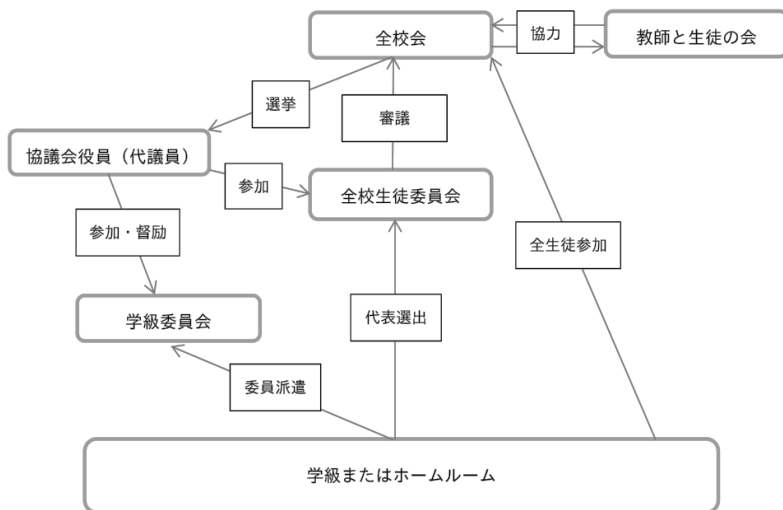


図1:『新しい中学校の手引』における生徒会組織図(例)

ただし、これはあくまで想定図である。というのも、同書の記述には、①同じ役割を付与されていると考えられる委員会名称が、同定困難なほど表記揺れしている、②委員会間の関係性記述が不明瞭で対応関係が把握不能である、などの問題が含まれているからである。とはいえ、以上のような概念図を作成できる程度には、生徒会組織に対する具体的な指示が与えられるに至っている点は注目に値するだろう。

また、もう一点注目すべき点を指摘するとすれば、上述の機構が学校組織の枠組みを超えて、広く父母や地域とつながる組織として構想されている点である。こうした強調は、本連載で確認してきた大阪軍政部などの指導（ニューズレター57・58号所収）では見られない特徴である。

〈活動面〉

次に、実際の運営及び活動について。この部分にも、上述したような地域とのつながりを意識した記述が見受けられる。それらは、技術的問題は専門家に相談せよ、必要な際には適切に計画された会議を開催せよ、会議の際には会議録を作り、多くの生徒が参加できるようにせよなどの基本的具体的な指導方針と合わせて、提示される次のような記述である。

活動は、生徒の学校生活に直接関係のあるところから、漸次、より広い社会問題に進めること。⁷

このように、生徒会活動の範囲は学校内の問題に留められることなく、より広い社会問題にまで含めた内容へと発展させることを想定されていることは極めて興味深い。

また、同書では、具体的な活動として、現在の生徒会活動においても一般に見られる生徒集会の企画、新入生歓迎会の企画、保健衛生、学校新聞や雑誌・告示の発行、会計活動、クラブ活動の調整、学校図書館の秩序維持などと合わせて、遺失物の世話、学校の安全・防火訓練・危険物の除去、外来者の応接など、現在は一般に教職員によって行われる活動例をもあげている。こうした内容は、生徒会が学校の顔として見られていたこと、広く社会とのつながりを意識し、学校管理への部分的な参加を求められていたことを示している。

一方、こうした活動の中には、学校経営事項への直接の参加につながる事項は含まれていないことには、注意を向ける必要があるだろう。以上のような生徒会の活動は、あくまで与えられた範囲内の活動であって、その範囲にとらわれない生徒の自由な意見を取りまとめ、学校経営に対して積極的に関与するような契機は、同書内には存在していない。あくまで、「部分的な参加」であったことは、今後の議論をたどる上においても、極めて重要な点となる。

おわりに

本稿では、以上のように『新しい中学校の手引』と、そこにみられる生徒会論を整理してきた。再三確認してきたように、『手引』は、「生徒会」という名称が初出であるのみならず、相当の分量がまとまった「生徒会論」として刊行された初めての文部省著作でもあった。

以降の連載では、『手引』の後、1949年中に相次いで刊行される『新制中学校・高等学校望ましい運営の指針』、「特別教育計画の組織と管理」（『中学校・高等学校の生徒指導』・『中学校・高等学校管理の手引』所収）の生徒会論を確認する。また、それらにおける生徒会論が、『手引』のそれとどのように相違するかについても、以降の連載で検討されるであろう。これらの研究を経ることによ

り、成立期において、「生徒会」がどのように構想されていたか、その全体像が浮かび上がると考えている。

注

- 1 林部一二(1967=2003),「新制中学校20年の変遷」,『林部一二教育著作集 第一巻 戦後新教育の成立と特色』,盈進社:5-12,引用はpp.7-8.
- 2 「特別教育活動」の正式な課程内への組み入れは1949年5月の発学261号「『新制中学校の教科と時間数』の改正について」に依る。原文は以下を参照のこと。
・文部省(1949)「『新制中学校の教科と時間数』の改正について一発学261号通達全文」,日本職業指導協会(1949),『職業指導』,22(7);8-10.
- 3 文部省学校教育局編(1949)『新しい中学校の手引』,明治図書, pp.163-164.
- 4 同前, pp.174-176.
- 5 同前, p.172.
- 6 同前, pp.176-178
- 7 同前, p.180.

カレッジノベルの研究への道(10)

: 久米正雄「受験生の手記」

よしの 吉野 たけひろ 剛弘 (埼玉学園大学)

今号からは、久米正雄が書いた別の作品である「受験生の手記」について検討する。

「受験生の手記」の主人公は、高等学校の入学試験に臨もうとしている浪人生であり、大学生ではない。しかし、大学への入学が事実上保証されていた高等学校の入学試験を受けようとしていたわけなので、現代風に言えば大学入試に落ちて浪人しているものと同等と考えることができる。つまり、「受験生の手記」は、カレッジノベルの「辺境」とでもいうべき作品である。

まずは、この作品のあらすじを紹介する。主人公の健吉は一高の受験に一度失敗して一浪中で、今年も東京の義兄の家で受験勉強に取り組んでいる。といっても、あまり身が入らない上、義兄の姪の澄子に恋心を抱く。そうこうしているうちに、年子である弟の健次が一高受験のため上京してくる。試験の結果、弟は合格し、主人公はまたしても落第、さらに澄子が弟に恋をしていることが分かる。健吉はそれら二重のダメージのために自暴自棄になり、最後には猪苗代湖と思われる湖に入水自殺する。

久米正雄の略歴については第 59 号でも紹介したが、久米は一高に無試験検定で入学しているため、高等学校入試を知らない。小説の最後には、「作者附記」として以下のように記されている。

この遺書めいた手記は、突堤の端にその他の持ち物と共に残されて在った。彼の死体は翌朝発見された。急を聞いて馳せつけた弟の手に、やがてこの手記は渡された。弟はそれを誰にも見せず、今の今まで匿してゐた。がある偶然の話から、私にそ

れを打あげた。そして一つは死んだ兄の追福のために、一つはかう云ふ苦しみを兄と共にするであらう幾多受験生の参考のために、世の中に発表する事を私へ委託した。私は原文に若干の修正を施して、兎にも角にも一篇の読み物にした。只、ひそかに気遣ふのは、私の加へた文章上の斧鉞が、却つて簡明素朴な調子を傷けそれがために少からず感銘を薄くしはしまいかと云ふ事である。因に弟は私の友達で、二三級下の大学生である。だからこの話は受験制度が、今のやうに総合的に改良されない、以前の事であると思つて貰ひ度い。

これを額面通りに受け止めれば、久米が第三者から受け取った手記を加筆修正した作品ということになる。もちろんそのようなことはなく、この「作者附記」そのものに創作が含まれている。

小谷野敦は、「佐治祐吉に、俺は受験のことは知らないから話せと言って、佐治が話したことを書いたと、佐治が言っている」(『久米正雄伝』p.230)と述べている。この部分の出典として、佐治祐吉・村松正俊「座談会 第五次『新思潮』とその時代」『新思潮』[第十六次]3号(1962年2月)と書かれているが、他にも興味深い指摘があるので、以下「受験生の手記」に関わる箇所を引用する。

久米は私と同郷ですが、福島県の安積中学の優等生でしてね、一高へ無試験で入ったんですよ。それで試験のことは知らないからお前話せっていう。話してやったらそれをそのまま書いてね(笑)、優等生でした。俺はプロフィールはいいんだ、なんてね。相当な才人ですね。(p.58)

この話を正しいとすると、「受験生の手記」のもとには、佐治が受けた高等学校入試ということになる。しかも、「受験生の手記」のよさは、入学試験というものを舞台にし、それについて調べた上で執筆

したことにあると自身が評価していることも分かる。

佐治祐吉は、1894(明治27)年6月11日生まれで、1916(大正5)年に東京帝国大学に入学している。これらの事実から、高等学校を受験したのは1911(明治45)年か、1913(大正2)年という計算になる。その意味で、情報源が「私の友達で、二三級下の大学生」で、「この話は受験制度が、今のやうに総合的に改良されない、以前の事」という「作者附記」の記述は正確である。この時期の入学試験は、久米が通った無試験検定と、普通の入学試験の2通りの入学方式が存在した時期である。なお、入学試験は共通問題ではあるものの、入学者の選定は各学校で行うという方法を取っていた。この点については検討すべきことがあるので、詳細は別の機会にゆずることにしたい。

この小説は、カレツジノベルという観点からみれば、当時の受験生の姿が垣間見えるという意味で重要である。しかも、作者本人がプロファイリングのよさを誇っているのである。そうであるならば、入学試験にかかわる叙述がどの程度正確なのかを検討してみる価値はあるだろう。

しかし、この小説が評判を呼んだのはそのような理由からだけではあるまい。この小説は、高等学校受験生というエリート層の「うぶ」な青年が、女性に翻弄されつつ、「大人の階段」を上ろうとするも挫折して死を選ぶという悲劇でもある。

そのような点を勘案すると、この「受験生の手記」という小説は、前号まで取り上げていた「競漕」より重層的である。カレツジノベルという観点からこの小説をみたときに、高等学校入試や受験勉強の叙述の内容、エリート青年の恋愛譚という2つの観点らの検討が必要になるだろう。

次号からは上述の点について、小説の叙述にも触れながら検討していくことにする。

木下広次をめぐる史料(7) —教育勅語に関する

校長訓話(1890年10月30日)草稿(1) —

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

教育勅語をめぐる木下の史料

第59号では、次は木下の一高歴史画を取り上げると予告していたが、少し予定を変更し、これまでやや敬遠してきた教育勅語をめぐる木下の史料を扱ってみたい。

広く知られていることだが、木下広次は第一高等中学校において1890年に寄宿舎の生徒自治を導入し、校友会の設立を承認するとともに、1889年に「護国旗」をつくり、1890年に発布された教育勅語を遵奉することを強く求める校長でもあった。一高の寄宿舎自治について調べ始めた時、木下広次の上記のような両面をどのように捉えたらよいのか、正直に言ってよく分からなかった。

しかし、第59号までの本連載で、「国の維持力(1899年躬行会例会)」と「大日本の教育に就いて」を取り上げていく中で、木下広次が彼独特の文脈のなかで、封建時代の武士に代わって近代国家の「維持力」となる集団を教育によって創出しようとする国家主義的な教育を強力に推進しようとしていたことが、自分なりに理解できたような気がしてきた。そして、木下は国家主義教育をおこなう上で、知識による教育ではなく、「感触」教育が必要であると考えていたことが、国家主義教育と生徒自治とを結ぶ鍵になるのではないかと考え始めた。

1890年11月3日天長節での訓話草稿

東京大学駒場博物館には、教育勅語に関する木下の考え方の手がかりになる重要な史料が所蔵されている。その一つが本号で取り上げる校長訓話草稿¹⁾である。

この史料には、書かれた年月日は明記されていないが、以下の史料全文を通じて、この史料は演説の草稿と思われることと、この

演説のなかで教育の基本に関して出された勅語を捧読し、その勅語について木下校長の見解を述べていることが分かる。

第一高等中学校の『校友会雑誌』第1号(1890年11月26日)の雑報欄に、11月3日に生徒一同が参加する天長節祝賀会が倫理室(倫理講堂)で行われ、木下校長によって10月30日に出された教育勅語勅語の朗読と訓話が行われたことが述べられている²⁾。

この雑報記事で紹介されている木下の訓話の内容は、今回取り上げる駒場博物館所蔵史料とよく似ている。また、史料中に字句の修正の跡が残されている。こうしたことから、この史料は、1890年11月3日に行われた天長節祝賀会での校長訓話の草稿であると推定することができる。このことについては、鈴木範久『内村鑑三日録 1881~1891 一高不敬事件(上)』でも指摘されている³⁾。

教員諸君生徒諸君我叡聖文武ナル

天皇陛下ハ本日ヲ以テ帝国教育ノ基本即将来臣民タルモノハ倚テ履ムヘキノ大本ヲ示シ賜ヘリ故ニ我文部大臣ハ本校長ニ之ヲ捧読スヘキコトヲ命セリ依テ之ヨリ謹テ朗読セン諸君ソレ謹聴アルヘシ

右ニ就キ学校殊ニ教育ノ任ニ当ル余等ニ於テハ無限ノ喜悅ヲ持ツモノナリ顧ミルニ昔封建時代ニ養成シタル武士道廢レテ以来我々帝国臣民タルモノハ倚テ履ムヘキノ大本ヲ失ヒ維新後二十余年其間子弟ノ教育上何ヲ基本トシテ将来帝国ノ良民タラシムヘキノ教ヲ施スヘキヤ疑ノ中ニ養成シツハ来リシコト恰モ大海ニ漂流スルノ思アラシメタリ 叡慮夙ニ此ニ存シ今日畏クモ此勅諭ヲ下シ賜〔この箇所「ヒ」と書いて消した跡あり〕テ吾々臣民タルモノハ倚テ歩ムヘキノ基本ヲ示シ賜ヘリ故ニ今日子弟ノ教育ニ当ルモノハ尚ホ渺茫タル海洋ニ一嶋ヲ発見シタルカ如ク其心事思フヘキナリ就テハ是マテ親ニ孝養〔この箇所「君父ニ忠孝」と書いて消した跡あり〕ヲ尽シ長上ニ尊敬ヲナスコトヲ子弟ノ本分トハナサズ及テ世ノ厄介ナル習俗トナセルカ如キハ実ニ此 勅諭ニ悖戾セルモノニシテ我帝国臣民タルノ資格ナキモノナリスノ如キノ輩ハ一日モ帝国ノ地ニ生活

スヘカラス速カニ異邦ニ航スルカ若クハ割腹シテ可ナリ苟クモ高等中学ノ門ニ出入スルモノハ一人トシテカクノ如キ不忠不臣ナルモノハナク皆相互ニ此 聖旨ヲ遵奉シ〔この箇所「倚テ以テ」と書いて消した跡あり〕テ忘レサルノ人タルヘシ余ハ敢テ宣誓ス今日ヨリ以往ハ特ニ此 聖旨ヲ奉体シ倚テ以テ当校教育ノ任ヲ尽クスヘシ万一寸毫モ悖戾セルノ点ヲ見出サルハアラハ飽マテ詰責セラレンコトヲ希望スルモノナリ実ニ当校ハ右ノ 聖意ノ在ルトコロヲ伝フルノ場所ナレハ余等ハ校ノ内外ヲ問ハス時ノ何タルヲ論セス苟クモ人ヲ陵辱シ己ノ非ヲ縫飾シ校規ヲ紊乱スルカ如キモノアレハ是 聖意ニ戾レル不忠不義ノ甚シキモノニシテ臣民ノ資格ナキモノナレハ直ニ校門外ニ放逐セサルヲ得サルナリ尤モ今日ヨリ以往コノ 聖旨ヲ遵奉スルニ就キテハ校規ニ幾分ノ改革ヲ加フヘキナレハ早晚之ヲ発表スルノ日アルヘシ人アリ若シコノ 勅諭ヲ以テ一学説一論議トシテ是非〔この箇所「軽視」と書いて消した跡あり〕スルモノアリトセンカ余ハカクノ如キノ人ニハ面接スルコトヲ欲セス否敢テ絶交ヲ断行スルモノナリ苟クモ今日安心立命ノ岸ニ到着シタル吾々臣民タルモノハ殊更注意服膺シテ以テ 叡慮ノ存スルトコロヲ須臾クモ忘ルヘカラサルナリ余ハ不肖ナカラ乏ヲ校長ニ受クルヲ以テ本日此 勅諭ヲ朗読スルノ光榮ヲ得尚此後諸君ト共ニ謹テ 聖旨ヲ遵奉スルノ幸福ヲ得タルモノ実ニ満悦ノ至ニ堪ヘサルナリ謹テ茲ニ 皇祚万歳ヲ祈ル

次号では、この史料の内容について考察したい。

-
1. 東京大学駒場博物館所蔵、請求記号(8)1「校長訓話草稿」。
 2. 『校友会雑誌』第1号、第一高等中学校校友会、1890年11月26日、40頁。
 3. 鈴木範久『内村鑑三日録1881～1891 一高不敬事件(上)』教文館、1993年、82頁。同書においても、今回取り上げた校長訓話(草稿)は前文収録されている。ただし、修正箇所については無視されていたり、いくつか読み間違いとみられる文字もあるので、本記事で全文翻刻した。

「未完の教授学者」としての長谷川乙彦③

—「個性と教育」を読む(1)—

はせがわ ようじ
長谷川 鷹士(早稲田大学)

今回は前回予告した通り、長谷川の最初期の論文である「個性と教育」について、長谷川が個性に応じた教授法を主張した論理を検討する。なお具体的な教授法の中身の検討は次回に回すことにする。初回で記した通り、この論文は1895年9月から11月にかけて『大日本教育会雑誌』第169号から第171号まで分割して掲載されたものである。

まず目次構成を示しておく。

表1 「個性と教育」の目次構成

第1章	個性教育の意義
第2章	教育上個性を研究することの必要
第3章	個性の研究
第4章	個性の識別法
第5章	個性に関する教育法
第6章	孔子の教育法
第7章	個性教育実施に関する方案
第8章	結論

第6章と第8章を除いて個性という単語が章題に入っている。長谷川の個性へのこだわりは明らかである。第6章も孔子を個性に応じた教授法に通じた教育者であったと捉えたうえでの立項であり、つまり、すべての章で「個性と教育」を論じているといえる。長谷川の個性の定義は「天賦の稟性、自然の境遇、周囲の事情等より起

れる一個人の特性、特質、若くは偏向等を総称するもの」である(1)。また「或る学科に於て級中の多数と共にすること能はざる個性」を持っている児童に対して「教師より特に之に対するの処置と待遇」とがないために「落第の不幸を見るに至る」のであると述べており、(2)、学習内容の定着を阻害する要因として、個性を捉えていたといえるだろう。第2回で述べたように長谷川は「学歴主義」規範を一定程度内面化していた。児童たちが「立身出世」を遂げるうえで阻害要因となるものとして個性をとらえ、その阻害要因をできる限り取り除くために個性に応じた教授法が必要であると考えたのである。すなわち教員が学級中の「一団の中に於ける個々の特性」を把握し、「是に適する方案」を選択できるようになる必要があったのである(3)。

ところで長谷川が論文を発表したころ、日本の教育界の主流な教育学説は「ヘルバルト主義教育学」であった。長谷川の個性理解と「ヘルバルト主義教育学」の個性理解の関係は当然、検討しておくべき点である。鵜殿篤によれば「ヘルバルト主義教育学」に対する批判者たちが「ヘルバルト主義教育学」は教授万能論であり、「教授の限界としての個性」を把握していないと批判したにもかかわらず、「ヘルバルト主義教育学」もその点については充分に考慮に入っていた(4)。たとえば長谷川の論文と同年に出版された湯本武比古『新編教授学』は当時における日本の「ヘルバルト主義教育学」の受容のあり方を示す書籍だが、そこには授業をする際「必ず常ニ生徒ノ偏性ヲ察シ、一律ヲ以テ之ヲ規スベカラズ」とある(5)。「ヘルバルト主義教育学」が一定程度「教授の限界」としての個性に着目していたのは明らかである。長谷川の議論は「教授の限界」としての個性を把握し、その克服を目指すものであり、「ヘルバルト主義教育学」の個性理解に近いものであったといえる。実際、長谷川は論文中でヘルバルト主義の教育学者の学説を参照しており、「ヘルバルト主義教育学」の影響は明らかであった。

しかし、長谷川の個性に応じた教育法の主張は「ヘルバルト主義教育学」を純粹に受け継いだものとは見られない。むしろ「ヘルバルト主義教育学」の「現状」への不満があったと見るべきであろう。そのことは従来の教育学では「普通一般に亘れる心理学及其の応用法」は十分に研究されてきたが、「個性に関する研究、観察及是に基ける教育の方法」の研究は甚だ不十分であると批判していることなどに明らかである(6)。つまり、上述したように長谷川は「落第の不幸」をもたらすものとして個性を把握していたため、「ヘルバルト主義教育学」は学習の阻害要因を取り除く教授方法の研究を十分に深められていないとして批判したのである。上述のように「ヘルバルト主義教育学」は学習の阻害要因としての個性という認識は示していた。その点で長谷川は「ヘルバルト主義教育学」と同様の認識を持っていた。しかし、具体的教授法という点については、長谷川は「ヘルバルト主義教育学」に満足していなかったのである。

今回は長谷川が構想した個性に応じる教授法の具体的な内容を分析する。

注

(1)長谷川乙彦「個性と教育」『大日本教育会雑誌』第169号、p.35。

(2)同上、p.37。

(3)同上、p.36。

(4)鵜殿篤「教育的」及び「個性」『研究室紀要』第27号、東京大学大学院教育学研究室、2001、p.21。

(5)湯本武比古『新編教授学』(仲新、稲垣忠彦、佐藤秀夫編『新大日本教科書教授法資料集成第3巻 教授法書3』東京書籍、1982、p.232)。

(6)長谷川、前掲、p.36。

『久徴館』のめざすもの(1)

こみやま みちお
小宮山 道夫(広島大学)

『久徴館同窓会雑誌』第2号には「久徴館沿革」という項目が立ち、久徴館創立者土岐横の名で「久徴館開館式場ニ於テノ演舌」とする久徴館設置までの経緯が示されている。

久徴館の開館式は1886(明治19)年5月9日のことで、この時の演説を「吾人同窓会員懐旧ノ情ヲ温ムル」ことと「世ノ意ヲ学生涵養ニ注スル者ノ参考」のために『久徴館同窓会雑誌』に掲載したと説明されている。

土岐は「是ヨリ先キ同(明治十五:引用者注)年九月十六日石川県留学生十三名土岐横ノ寓ニ会シ人才養育ノ目的ヲ以テ一社ヲ起サンコトヲ議シ惣則十一條ヲ定ム是レ即チ該社ノ目的ヲ明カニスル者ナルカ故ニ小生今爰ニソノ十一條中ニ含蓄スル意義ヲ約言シテ以テ本館創立ノ目的ヲ明カニセントス」と述べ、久徴館の創立する前に、久徴社を設立し、結社の目的として十一条を掲げたことを明らかにした。

以下長くなるが演説を引用したい。

第一 県下ニアル壯年子弟ニシテ東京留学ニ最適當ナル者ハ可成的出京セシムルコト元来ソノ家ハ富ミテ学資ヲ給スルニ足りソノ子弟ハ進テ学ニ志シ東京ニ出ント希フ者ニシテソノ父兄カ敢テ之ヲ許サザル者ハ実ニ遺憾ノ甚タシキ者ト曰ハサルヲ得ス而シテソノ之ヲ致ス所以ノ者ヲ考フルニ彼ノ父兄等皆ナ謂ラク是迄遊学ヲ名トシテ出京スル者ノ中能ク業ヲ成シ志ヲ遂クル者果シテ幾人カアル或ハ荏苒歲月ヲ都会ニ費シソノ輕躁浮薄ノ風ニ染ミテ空シク帰ル者アリ或ハ放蕩遊逸ヲ事トシ身ヲ害シ財ヲ尽シテ終ニソノ身ノ置キ所

ヲ失フ者アリ何町ノ何某モ已ニ然リ何村ノ何兵衛モ亦此ノ如シ商鑑遠カラス我豈之ニ倣フテ我子弟ヲシテ無頼ノ者ト為スニ忍ヒンヤ我豈我子弟ノ東京ニ於テ遊逸スル資ヲ給スルモノナランヤト蓋父兄ノ虞ル所一応其理ナキニアラス而シテ今コノ父兄ヲシテ安然ソノ子弟ヲ東京ニ遊学セシムルニ至ラスヘキ道アリヤ如何日クアリ彼ノ父兄輩ヲシテ一ツヒ出京セシモノハ必スソノ方向ヲ誤ルコトナク終ニ能ク相応ノ目的ヲ達スヘシト深く信シテ疑ハサルニ至ラシムルコト是ナリ久徴館創立者ノ目的是ニアリ

第二県下学生ノ一タヒ出京シタル者ハ其方向ヲ失フコトナク必ス之ヲシテ成業セシムルコト少年子弟ノ志ヲ立テ父母ノ膝下ヲ離レテ始メテコノ地ニ来ルヤ府下ノ状況ニ通セス学事ノ情態ヲ知ラス何学ヲ修シテ尤モ適当ナルヤヲ弁セス仮令ヒ之ヲ弁スル者ト雖トモ如何ナル道ヲ求メテ之ヲ修ス可キヤ覺ラス是ニ於テ荏苒数月ヲ徒費スル者比々皆ナ是ナリ夫レ人目的立チ方向定リ常ニ従事スレハ自ラ身心共ニ健然ナル者ナリ若シ其レ目的定ラス常業ニ歛キ常ニ事ナキヲ憂レハ或ハ遊怠放逸ノ慣習ヲ無シ或ハ卑屈賤陋ノ心ヲ作り或ハ又脚氣ヲ病ヒ肺勞ヲ病ムニ至ル少年子弟ノ新ニ此ノ都ニ遊学シテ往々其方向ヲ誤ル者是ソノ一大原因ニアラサル無キヲ得ンヤ嗚呼府下ノ牛肉店ニ上リ寄席ニ入り込ミ又ハ下宿屋ノ内幕ニ迄立チ入ラストモ街衢ニ来往スル少年書生ノ言動挙動ト容貌風采トヲ察セハ育英ニ意ヲ用キル者誰カ痛歎セサル者アランヤ且ツソレ人ノ才性長スル所アリ短ナル所アリ又東京数多ノ私塾學校海陸士官學校ノ予備ニ適スル者アリ職工山林農學校ノ階梯トナスニ適当スル者アリ高等師範學校商業學校ニ入タントスル者ハ自ラソノ準備ヲナサルヘカラス大學校ニ入ルノ志アル者ハソノ準備ヲナサルヘカラズ然ルニ大學校ニ入ルノ志アリテ商業學校ニ入ルニ適シタ

ル私塾ニ入り農学校ニ入ラント欲スル者カ海軍士官学校ノ
予備ニ適当シタル学校ニ入ル如キコト新出京ノ少年子弟ニ
於テ屢見ル所ナリ又ソノ才理学ニ長スル者カ陸軍ニ志サシ
ソノ性職工或ハ山林学ニ適スル者カ師範学校ニ入ラントス
ルカ如キコトモ亦常ニ見ル所ナリ是ニ於テ昨月ハ甲ノ義塾
ヲ出テ今月ハ乙ノ私学ヲ去リ昨年ハ某学校ニ在リシ者ニシ
テ今年ハ更ニ又他学校ニ入ラントスルモノ比々皆然ラサル
ハナシ嗚呼此ノ地ニ遊学スル者ノ中能クソノ業ヲ卒ヘソノ志
ヲ成ス者甚タ尠ナル者ハ是ソノ一大原因ニアラサルナキ
ヲ得ンヤ然ラハ則チ小年子弟ノ才性ヲ考ヘソノ長ヲ觀短ヲ
察シテ以テ是ヲシテ適宜ノ学ヲ志サシメ之ヲシテ適宜ノ学
校ニ入ラシメ以テ各自ソノ分ニ応シテ志ヲ成シ業ヲ卒ヘシ
ムルコト今日ノ一大急務トナサハルヘカラス且ツ夫レ此地ニ
遊学スル者下宿屋ニ投宿セサレハ必ス私塾ニ寄留ス然リ而
シテ東京私塾ノ寄宿舍ノ如キハ大概皆ナ規律緩慢諸事下
宿屋ト一般ナシ即チ屋舎矯陋ニ屋室穢雜ニソノ羞膳ノ如キ
モ只外見ヲノミ是思ヒテ僅ニ以テ生ヲ養ヒ服ヲ肥ヤスニ足
ルノミナリ是実ニ修業学生ニ適スル居食ト言フ可カラス況ン
ヤ同窓同宿ノ者ハ往々皆ナ遊怠放逸野卑賤陋ノ者ノミナレ
ハ少年子弟ヲシテ此ノ輩ニ接セシムルハ白絲ヲ朱中ニ投ス
ルカ如シカノ醜俗ニ浸染セシメサラント欲スルモ畢ニ得ヘカ
ラサルナリ故ニ下宿屋私塾ハ共ニ少年子弟ヲ寄宿サスヘキ
処ニアラサルナリ然ラハ則チ今爽■[土偏に豈]ノ処高燥ノ
地ヲ撰ヒテ一寄宿館ヲ置キ居室清淨羞膳甘潔ニシテソノ交
ハル所ハ温良ソノ語ル所ハ高尚ナラシメ以テ之ヲ善導スル
ノ方法ヲ設置シ新ニ出京スル少年子弟ハ必ス先ツコノ館ニ
入ラシメ而シテソノ才性ノ適スル所ヲ觀ソノ学資ノ出ル所ヲ
察シテソノ目的ヲ定メソノ方向ヲ立テ然ル後其志操漸堅確
能ク自ラ立ツコトヲ得ルニ迫ヒテ之ヲ縦テ俊偉卓越犖ノ士ト

相結納セシメハ庶幾クハ其一生ヲ誤ルコトナク皆有用ノ人ト成ルコトヲ得ンカ其然リ然リト雖トモ此ノ地ニ遊学スル少年子弟ノ中ニハ各父兄ノ存スル者アルヘシ又此ノ地ニ住スル先達ノ士君子ニシテ自己或ハ其父兄ノ知己タル者モ多ク是アルヘシ然レトモ熟々之ヲ考フルニ新ニ出京セル少年子弟ノ目的ヲ立テ方向ヲ定ムルニ於テ尤モ適當ナル者ハ前ノ人々ニアラスシテ及テ今日学事ノ形況ヲ知り諸学校ノ態裁ヲ知ル者即チ当時諸官立学校ニアリテ数年ヲ費シタル書生ニ如ク者アラサルヘキヲ知ルナリ是レ我輩有志諸君カー介書生ノ身ヲ以テ久徴館ヲ起シタル所以ナリ(以下次号)

そしてこの続きは第4号に掲載される。

(続く)

体験的文献紹介(9) 一新渡戸稲造の女子教育

とプロテスタント系女学校の研究開始—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

新渡戸稲造は米国とドイツの大学へ留学して帰国後、台湾総督・児玉源太郎の懇請で台湾総督府の糖務局長になって砂糖プランテーションを成功させた。また第一次大戦後の国際連盟事務次長に就任して国際協調に力を尽くした。帰国後は勅選の貴族院議員、また請われて国際会議の委員になっている。事業家、政治家、外交家として専門的知識と力量を持つ人物であった。また東京帝国大学、京都帝国大学の教授にもなり『日本土地所有論(独文)』『日米交通論(英文)』その他の論文もある学者である。しかし新渡戸稲造の本領は第一高等学校校長、東京女子大学学長、女子経済専門学校校長として多くの卒業生に慕われた教育者であった。『修養』『世渡りの道』『一日一善』『人生読本』等、大衆向けの通俗教育書の著述も多い。さらに新渡戸の生涯にわたって調べてみると多くの女学校設立にかかわっているのである。

最初は普連土女学校とのかかわりである。1883(明治16)年、フィラデルフィアで米国フレンド派の婦人会によって外国伝道会が組織された。たまたま当地に来ていた新渡戸稲造が招かれて日本の事情を講演した。これが機縁で日本伝道がきまり、87年、東京の麻布に普連土女学校が開かれたのである。

次は札幌の北星女学校がある。1887年、札幌に米国婦人スミスが女学校をはじめた。隣地に札幌農学校助教授の新渡戸稲造が住んでいた。新渡戸は隣のよしみで英文学や西洋史の授業をしたところ生徒たちに慕われたので時折招待して懇談した。後に東京に恵泉女学校をはじめた河井道子はこの時の生徒である。河井は新渡

戸を父と仰ぎ、恵泉女学校には新渡戸稲造の写真が長く飾られた。札幌のスミスの女学校は新渡戸の命名で北星女学校となり、今に続いている。

大正のはじめの頃、ある会場で新渡戸稲造が講演した後、余興として杵屋^{きねややしち}弥七一門の長唄があった。これが新渡戸と弥七を結びつけた機縁である。弥七は杵屋一門の新進で三味線楽譜を研究していた。邦楽も聞き覚えの旧式ではいけない。西洋音楽にならって楽譜をつくらなければならないと言うものである。新渡戸はこれに共感し、物心両面にわたって援助した。待望の三味線楽譜が完成し出版したが、一向に売れず弥七は静岡に身をかくした。その失意の弥七を激まし、借金を埋めて再起させたのは新渡戸稲造であった。麻布三河台に三味線学校杵屋女塾と喧伝されたのがこれである。

1918年、東京女子大学が創立された。バプチスト、メソジスト、プレスビテリアン等キリスト教プロテスタント10派合同による女子大学である。抱擁力のある新渡戸稲造はこのような宗派合同の大学学長になるのに最適者である。推されて学長に就任した。

1931年、女子経済専門学校の開校に際し、新渡戸が校長に就任した^{いきさつ}経緯は本シリーズ前号で述べたので、その附属高等女学校の校長になった経緯を述べよう。

1923年、東京府豊多摩郡中野町に私立成美高等女学校が開校した。創立者は女高師出身の足立カノである。しかるに28年、足立カノは亡くなった。これを受けつぐ者がいなくなって後任者を探した。これを聞いた新渡戸は森本厚吉と中野の校舎を見に行った。何も知らない生徒達は喜々として校庭で遊んでいる。新渡戸は胸を打たれて早速、中野町の有力者と懇談した。人々は令名高い新渡戸稲造が校長になるならばという条件づきで協力を誓ったという。

このような新渡戸稲造の行動をみた私は続いて新渡戸の教育思想特に女子教育思想を調べねばならぬという衝動にかられたのである。

当時私は前年から引き続いて河野先生宅と早稲田大学大学院及び東洋文化研究所での漢文講読と明治新聞雑誌文庫での私塾記事筆写を続けていた。明治の新聞の権威で当文庫の主任西田長寿先生に質問することしばしばであったが、それは木村毅先生に聞きなさいと言われることもあった。作家の木村毅は『明治文化全集』の編集責任者であり、早稲田大学で新聞史・新聞論の講義をしていたので私も聴講したことがある。博学多識の大先生であった。先生のお嬢さんは女子学院の出身で私の妻と同窓生である。私はそのお嬢さんを通じて木村先生に面会を申し込んだら気軽に応じて下さった。談明治に及ぶや、先生執筆中のクーデンホフ伯爵夫人光子のことからはじまって止まることを知らない。恍惚のうちに時がたってゆくのみである。勇を鼓して女学校の起源を聞いたら“そりゃあミッションスクールだよ”といとも簡単に答えられた。こちらもうすうすそれを感じていたから合点した。続いて思い出したように“京都の祇園に女紅場という遊女の女学校ができたから調べてごらん。マリアルーズ号事件と関係があるかも知れん”と示唆を貰った。

私は早速、銀座の教文館に行き、日本キリスト教史を買い求めた。比屋根安定『日本基督教史』、海老沢亮『日本基督教百年史』、『日本聖公会百年史』、青芳勝久『植村正久伝』等で明治期におけるキリスト教各派、とりわけプロテスタント各派の複雑な動きがわかった。同じ頃、基督教学校同盟が日本のプロテスタント系学校の歴史と現状を調査中であったが、61年、『日本におけるキリスト教学校教育の現状』として刊行されたので買い求めた。次はこれら女学校の沿革史である。各学校に問い合わせるのもよいが、まず

古書店で探すことにし、神田の古書店街で『女子学院五十年史』『東洋英和女学校五十年史』『普連土女学校五十年史』『神戸女学院七十年史』『尚絅女学院七十年史』等を見つけ買い求めた。求める人が少ないのであろう。いずれも低廉であった。これらの書籍は特定の著者がいるわけでもなく、該当学校の教員や卒業生が思い出を書き集めたものである。正確な記録をもとにした記述は少ない。開学時の公文書を確認するという学校沿革史の常道ができる前のことだから、甚だ読みにくい。しかしその時の現場に立ち合った者でなければ書けない真摯な文章に出合うこともある。要は根気比べで、読まんとするわれわれが、当時の状況をよく調べてこれらの追憶記を読むと創立者の気持がよくわかり、その苦心と喜びも伝ってくる。こうして私の女学校史の研究はキリスト教プロテスタント派の女学校開校の経緯^{いきさつ}解明からはじまったのである。

第6回執筆者勉強会記録

あめみや かずき
雨宮 和輝(早稲田大学)

2019年12月8日(日)に、神辺靖光会員のお宅にてニューズレター会員による勉強会が行われた。今回の勉強会では各会員が以下の2つの企画を実施した。

- ・企画① 各参加者の活動紹介&質疑応答
- ・企画② 現代の教育問題に関する討論

また、企画②に関しては (1)民間企業に採点を委託することの可否、(2)民間の英語試験を課そうとしたことの可否、について考えるものであった。本記録は紙幅の都合上、要点をまとめたものとなってしまうが、会員の発表内容及びそれに関する議論の様子を記述した。(以下、発表者順に内容を記述)

◎各参加者の活動紹介&質疑応答

・**雨宮和輝会員**:筆者(雨宮)は自身の近況報告及び現在の問題関心として、これまで行ってきた大正期の宗教系私学の個別分析がほぼ完了したことを中心に報告した。ただ、それと同時に、これまで言及が不足していた宗教制度について分析する必要があることについて言及した。この報告について神辺会員からは、宗教制度史に関しても研究が少ないこと、よって、今後はニューズレターでは是非、大正期における宗教制度を分析してはどうかという提案があった。

・**長谷川鷹士会員**:長谷川会員は現在の研究関心として師範学校の教員養成を挙げ、ニューズレターでは、師範学校の図書室の蔵書分析、教員に必要とされた教授法がどのような内容であったのかを分析していると報告した。さらに、東京高等師範学校教授も務めた長谷川乙彦の研究をしていることを述べた。富岡会員からは、師範学校では読書はどのように指導されていたのか、また、どのような読書が許可、禁止されていたのかという質問があった。また、神辺会員からは当時の教員養成と現在の教員養成との関係はどのようなものなのかという質問があった。さらに、田中会員からはなぜ師範学校を研究対象としたのかという質問があり、長谷川会員はその理由について、教員養成の原型である師範学校に着目しようと考えたためという回答があった。

・**猪俣大輝会員**：猪俣会員は、自身の高校時代の生徒会経験、また、生徒会研究の少なさから、生徒会研究に取り組もうとしていることを述べた。富岡会員からは、生徒会研究について、自治の精神、意識が強い学校は戦前からの伝統が強く、詳細な調査が必要と述べた。これに関連して松本深志高校の話題となり、同校では入学後半年間は寮歌の練習を秋の文化祭まで行うという話があり、戦前からの自治組織が強い事例として紹介された。また、小宮山会員からは生徒会が上手く機能しているのかはどこで判断するのかという質問があり、その部分の判断は難しいのではないかと指摘もあった。

・**田中智子会員**：田中会員はニューズレターでは各大学の資料室、アーカイブを紹介してきた。資料室紹介でニューズレター100号くらいまでの記事を執筆できるのではないかと見通しを報告された。谷本会員からは、理工系の大学の資料室やアーカイブの状況はどのようになっているのか、また、所蔵資料はどの程度あるのかを分析してもらいたいという意見があった。さらに、富岡会員からは、高校によっては資料館に来てほしいという学校もあるので、大学以外の資料館にも調査してはどうかという提案があった。

・**金澤冬樹会員**：金澤会員はニューズレターでは学生寮研究を続けていることを報告され、これまでも様々な学生寮を訪問し、寮生の自治に注目していることを述べた。また、旧制松本高校での夏期セミナーでは、思誠寮三世代の座談会が実施されたことにも触れた。富岡会員からは学生寮について、順天堂医学部は全寮制であり、医学部系の学生寮についても分析してみてもどうかという提案があった。さらに、谷本会員からは県出身のOB、OGらが東京に上京してくる子達を入寮させるという、現代的な寮をやっている話があり、大学に限らない学寮組織が存在しているのではないかと、そういった存在も分析してはどうかと指摘した。

・**松嶋哲哉会員**：松嶋会員は、現在は日教組関係の研究に取り組んでおり、社会党の資料を探していることを報告された。ニューズレターのコラムでは、訪れたオックスフォード大学がどのような様子であったのかについて説明したいと述べ、その際に購入された写真集を参加した各会員に見せていた。

・**長本裕子会員**：長本会員は現在ニューズレターで明治後期の女子専門学校について分析していることを報告された。谷本会員からは調査方法について質問があり、長本会員は野間教育研究所などで沿革史などを調査していると回答した。神辺会員からは、長本会員の調査に関連して、かつて多くの私学関係資料が散逸してしまったというお話もされていた。それに関連して、谷本

会員も機関で資料を受け入れるのは難しいので、資料の散逸を防ぐためには、個人で資料を受け入れるしかないのではないかと指摘した。

・**小宮山道夫会員**：小宮山会員は自身の近況報告をされた後、これまで取り組んできた高等中学校研究について、地域の人々が高等中学校をどのように利用しようとしていたのかを明らかにしたいと述べた。また、地域の学校を調査する上では、学校現場の人にも資料が大事であることを理解してほしいと主張した。神辺会員からは戦後、校舎建て替えの際に、学校資料が大量に捨てられていた話があり、こうした点からも地域の学校資料の保存が必要であると述べた。

・**山本剛会員**：山本会員は、現在取り組んでいる研究の報告と共に、担当している授業について、どのような授業が学生に役立つのかを考えながら授業を行っているとして述べた。谷本会員からは大学予科研究について、海外の大学の件についても研究してはどうかという提言があった。神辺会員は、日本の大学は特殊な形態であり、西洋の海外とは異なり個別性があるので、今後も研究を続けてほしいとの話であった。小宮山会員は留学生の増加に伴って、別科を作るべきではないかという意見もあるので、その際に予科の設置がどのようなものであったのかがわかると参考になるので、研究を進めてほしいという話があった。

・**神辺靖光会員**：神辺会員は、現在の教育史研究について、一次資料の分析が中心である状況について言及し、一次資料の検証ばかりに終止してしまっているのではないかと指摘をされた。研究者に必要なのは、小さなこと、決めたことをまずは書けるようにした上で、大きな問題につなげていくように、全体を通した研究をしなければいけないと指摘した。また、他人の良い研究成果を活用すべきであり、大きな視点で研究をする必要があると述べた。

・**富岡勝会員**：富岡会員は近況報告として、自身の研究対象でもある学生寮の教育と、現代の教育をつなげることができないかを考えていることを報告された。また、大学での学生との取り組みやアーカイブス作成といった活動についても述べた。そして、各学校にとって資料を保存することに意味があることを提言し、学校資料の活用方法を共に考えていくことが重要であると述べた。今後は研究会の呼びかけなども積極的に行っていきたいという意気込みを語った。

・**谷本宗生会員**：谷本会員はニューズレターでの毎月の執筆内容を報告した後に、大正期の郁文館中学校の編入受験生の日記を古本屋で購入されたことから、古本屋等での資料の購入も重要であることを指摘した。また、天理大学での年史編纂の一人として、大学史編纂の中でどういういったものを持ち越えていこうとしたのか、これまでの経験を振り返りながら発表することについても報告した。

また、勉強会の途中からではあったが、早稲田大学の湯川次義先生が参加した。湯川先生も近況報告をされたので、その内容を示す。

・**湯川次義先生**：湯川先生は現在、戦後の女子教育、また、大学沿革史の作成に取り組んでおり、特に教育刷新委員会、教育基本法の中で女子教育及び男女共学がどのように取り扱われているのかを着目していると話した。この報告については、神辺会員から、年史編纂について、学生運動等の部分についてはどのように取り扱うのかという質問があった。湯川先生も今後は、そちらの部分の研究も進めていくべきと考えていると述べた。

◎現代の教育問題に関する討論

各会員の近況報告の後には、もう一つの取り組みである「現代の教育問題に関する討論」が行われた。

この企画に関しては (1)民間企業に採点を委託することの可否、(2)民間の英語試験を課そうとしたことの可否、についての議論が行われることになった。まず、神辺会員から問題提起があり、現在の英語教育の経緯やその問題点についての発表があった。英語成績提供システムが延期されることが決定されたことに言及した。こうした教育界に影響を与えるような変更が度々起こることについては、財界、実業界、民間受験界の発言が大きくなっている一方で、教育学者の発言力が減少しているために起きていると指摘した。また、新制度下の試験の実施についても国立大、私大で異なっている対応を統一すべきであると述べた。

次に、現在の日本の学歴社会について、その成立経緯についての解説をされた。戦後の高校選択についても、50年代頃から、普通科高校が急増し、工業学校、農業学校のほとんどが普通科になった。そして、60年代からは高校全入運動が開始され、普通科でなければならないという雰囲気醸成されていったという説明をされた。また、戦前と戦後の受験及び選抜試験の違いについて言及し、戦後は内申書主義となり、結果として、内申書の操作につながっていったことを述べた。また、私立学校の受験は、特別なコースの設置や中高一貫、中学校から受験体制に向けてカリキュラムを形成するよう

になったと説明された。そして、このような高等教育の多様化が受験や学歴社会を複雑化させたと述べた。

以上の点から、今回の受験システムの変更について、これを教育産業界による問題として処理するのではなく、大学はこの問題に対してどのように対応するのかを考えるべきだと述べた。この発表について、富岡会員からは、新たに追加されることが試みられている記述式問題についても、文章を書くのではなく、要約する、まとめるといった趣旨の問題になることから、採点が難しいのではないかという話があった。また、今後は刻々と学校教育が変わっていくので、受験問題はグローバルな視点、巨視的な目で見なければならないだろうと提言した。今回は試験的に行われた本企画であったが、今後も現代の教育問題について討議したいという意見が多く、さらに多様な教育問題を取り上げて行われることが期待される。

以上、勉強会での会員各位の発表を紹介した。今回は新しい試みとして「現代の教育問題に関する討論」が行われた。勉強会の中でも話題となったが、教育史研究者も、現在の教育問題にも興味を持たなければならないと感じさせる試みであった。最後に、会場を御提供いただいた神辺靖光会員、また、今回も各会員への連絡や勉強会の準備をいただいた金澤冬樹会員に心から感謝を申し上げる。



発表の様子



短評・文献紹介

12月23日、天理大学百年史シンポジウムにて、私は基調報告「大学史編纂の経験と課題」を行いました。

<https://www.tenri-u.ac.jp/calendar/q3tncs00001t2bne.html>

「大学史編纂をいかに進めるか」の観点から、現状認識と課題への挑戦的な取組みの事例として、自身の「金沢大学五十年史」、「東京大学教育学部六十年史」、「大東文化大学百年史」の体験に触れながら皆さんにお話をいたしました。そのいずれの体験でも、やはり大学アーカイブス(年史編集施設を含む)の有効活用が重要なカギといえるでしょう。その延長線上として、天理大学の「開校十年誌」(1935年)所収の「自動車部」開設を取上げてみました。1934年、「自動車技術ヲ修得セシム」自動車部が天理外国語学校では開設されます。入部の対象は、「将来海外に於て本教の布教に従事せんとする者」、「研究、練習に真面目にてその成果を能く挙げ得るもの」などでした。車両：フィアット、シボレー、エセックスなど。修業期間：6ヶ月(期間内に運転免許試験を受ける)。練習時間：1人隔日30分。練習後、車両の手入掃除を行う。絶対禁煙。「部員外ノ者ヲ絶対乗車セシメザルコト」、「自己ノ練習日以外ニ練習又ハ乗車ヲ禁ズ」などに違反すれば、「成業ノ見込ナシト認ムル者」と同じく退部とする。同年11月、自動車部最初の遠出(平端經由法隆寺龍田～郡山奈良丹波市)が行われました。

そして、これからどのような大学史を基本的に目指す必要があるのでしょうか。1つは、やはり実証性に基づくものであるということだと思います。出典資料、参考文献等の明示を基本的に行うこと。歴史学研究の批判検証を踏まえて、内容構成立てとすることなど。1つは、学園物語り school historyという点も重要だといえます。読み手の視点から、学校の特色、学生や教職員の実態、学生街といったものを捉えること。とくに、消えた失われた事項事柄を含む変遷変化を、できるだけ記述することです。そして最後の1つは、新たな令和の時代に編纂されることの意味がとても重要だと思います。情報化・国際化のグローバルな時代に相応しい媒体形態にも考慮しつつ、次世代へ継承されより展開されていくことを願うかたちで、大学側の積極的で基本的な考えかたや姿勢を発信しながら、同時に社会や人々と共有連携し得るような多様さ柔軟さも合わせもつことを、編纂を糧としてきちんと示すことは至極大切だといえるでしょう。(谷本)

文章が書けないときの薬として、文章法、論文執筆法などをしばしば手にとるが、堀井憲一郎『いますぐ書け、の文章法』（筑摩新書、2011年）もそうした1冊として購入した。著者は「文章をうまく書けなくて悩んでいる人」のためになることと「ふつうに読み物としておもしろい」の両方を目指したというが（222頁）、かなり成功しているように感じた。例えば、「何か調査して、その結果をもとに文書を書きなさい」という題を出すと、物書きの資質がおそろしくらい如実にわかるという。ありがちなのは、「結果を予想せずに、やみくもに調査をした」文章であり、そうしたものは「箸にも棒にもかからない」（85頁）、「仮説なき調査は、恐ろしい無駄」（87頁）とバッサリ斬り捨て、「仮説を立てて、それを証明するために調査をする」のであり、「調査したという実績」ではなく「仮説」こそが大事だと述べる。歴史研究では史料調査は重要なので、著者の意見に全面賛成できないが、面白い指摘だ。面白さと実証のバランスを上手く取った教育史を書きたいものだ。（富岡）

会員消息

12月8日、2019年度年末のニューズレター同人らによる研究交流会（高円寺邸）の場を介して、自分自身の2019年度ニューズレター執筆遍歴を冷静に振り返ることができました。大学史・中高等教育史研究における課題として、当時の学生や教師の姿を、学寮・学塾日誌や校友・同窓会誌、故人日記や半生回顧録、学校報告書や生徒統計調査などから、レター執筆ではこの1年少しでも明らかにしようとしてみました。いまだ地道な成果かもしれませんが、今後とも継続して実践していくつもりです。千里の道も一歩、一歩の積み重ねからでしょう。（谷本）

2019年11月30日（土）と12月1日（日）にかけて日本生涯教育学会第40回大会（於：国立教育政策研究所社会教育実践研究センター）に参加しました。「多様な学習機会の創出と生涯学習」について学ぶ機会になり、充実した時間を過ごすことができました。多くの発表を拝聴いたしましたが、私自身も、「高校生による博物館図録の作成－主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践的研究－」および「学校教育における博物館活用の実態と課題－国立歴史民俗博物館と学校教育との連携に着目して－」の2本について発表を行いました。そのうち、「高校生による博物館図録の作成－主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践的研究－」について、日本生涯教育学会会長賞をいただくことができました。これを励みに今後も研究を深化させていこうと考えております。（八田）

2020年4月から新たな勤務先に赴くこととなります。そのためのいろいろな準備でレター執筆を怠ってしまいました。それにしても、これまでたくさんの学校で授業をさせていただき、すばらしい学生たちと出会いました。別れはつらいですが、新たな出会いが楽しみです。(山本剛)

立教大学の教育史ゼミに参加しているため、週一回は池袋の西口公園を通っています。つい最近、随分現代的に整備されてしまいましたが、戦前は東京府豊島師範学校の校地でした。かつて師範学校があったことを示す記念碑が開発に伴い撤去されてしまうのではないかと危惧していましたが、とりあえずは杞憂に済んだので安堵しています。

東京府豊島師範学校の校舎は戦災で焼失してしまいましたが、全国各地にはいくつか往時の師範学校の校舎が残されています。東京都内についても、東京府青山師範学校の校舎は東京学芸大学付属高等学校の校舎として利用されています。青山師範学校は1936年に現在の土地に移転されたのですが、当時の校長は長谷川乙彦でした。移転には「強盗慶太」と呼ばれた東京急行電鉄の事実上の創業者五島慶太が関わっていたようですが、管見の限り、長谷川が記した文章や学芸大学の沿革史では何故か触れられていません。移転に当たっては反対運動なども起こったようなので、近々、しっかり調べてみようと思っています。とりあえず、往時を偲ぶためにも東京学芸大学付属高等学校の校舎(最寄り東急東横線学芸大学駅)は見に行こうと思う今日この頃です。(長谷川)

先月は、執筆期に風邪をこじらせ1ヶ月原稿のお休みをいただきました。申し訳ありませんでした。インフルエンザや風邪など、かなり流行っているようです。みなさまも是非お気をつけください。(猪股)

これを書くと入稿時期がバレバレですが、新型コロナウイルス肺炎騒動に巻き込まれて大変な日々を過ごしています。(小宮山)

先日、83歳で母が永眠しました。十年程前から体の調子をわるくしていましたが、時々、施設や病院に母を訪ねていましたが、亡くなってみると、お見舞いについて元気づけているつもりが、逆に私が支えてもらっていたことに改めて気がつきました。やはり、そういうものでしょうね。(冨岡)

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面印刷」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。